

観音崎

崎山半島の北端

観音崎と観音島

七尾市街地から北へ約10キロ、細長く突き出たような形をしている崎山半島。東部は富山湾、西部は七尾湾に挟まれ、なだらかな丘陵地が大部分を占めている。北部は小口瀬戸を挟んで能登島と対し、半島の先端は、観音崎と呼んでいる。南の風が吹く朝方や、あいの風と呼ばれる冷たい北



観音崎と観音島

東の風が吹くと富山湾に浮かぶ立山連峰が姿を現す。観音崎周辺の鵜浦町は、昔のままの細い道と立ち並ぶ家並みが、懐かしい佇まいを感じさせる。富山湾から吹く風あたりが強いため、家々の前には、納屋や蔵を設けたり、風除けの竹を植えたりした漁村独特の風景が見られる。



端の瀬と観音島

観音島は周囲300メートルほどの小さな島であり、石積の歩道によって歩いて渡れるようになっていて、周遊の遊歩道が設けられており、散策することができる。能登島が間近に見え、その前を小さな漁船が、白い波しぶきを立

てて行き交う様子が見えた。清々しい風が吹き、葉の擦れ合う音が、心地良かった。

島には観音堂があり、地元では、観音さまと呼んで、厚い信仰をあつめている。端の瀬を隔てて所在する六軒の家が昔からお堂の世話をしている。元旦の午前0時には、六軒の家族が揃って初参りし、一年を通して朝晩毎日交代で鐘を鳴らしてお参りをするのが習わしである。

また、毎年3月15日には、釈迦涅槃会が行われ、海に携る者や町外からも多数の人が参詣に訪れる。

能登観音埼灯台

七尾湾の入口が見下ろせる観音崎の日和山に、大正3年「七尾湾口灯台」として初めて点灯された。昭和41年に現在の「能登観音埼灯台」に改称された。今日にいたるまで、七尾湾を出入りする船舶や付近で漁業を営む人々の道しるべとして重要な役目を果たし



長年灯台の管理を続ける和田一行さん

この地域は水が少なかったため、山からしみ出る水を溜めて、水源を確保していた。現



かぶり池

ている。現在は無人の施設だが、昭和50年までは灯台職員が住んでいた。灯台へ登る途中には、「かぶり池」という横穴の池がある。



崎山灯台まつり

在は使われていないが、その前で耳をすますと、池に落ちる水滴が、水琴のように涼しげな音を奏でていた。
 灯台は、青い空のキャンパスに白くそびえ立ち、爽やかなコントラストを描いていた。毎年5月の第4日曜日には、「崎山灯台まつり」が開催され、鶴浦町、岡町、三室町、湯川町からなる崎山地区の地元の人たちが中心となつて、多彩な催し物で賑わう。それに合わせて、灯台が一般公開され、灯台に登って眺める景色に歓声をあげる。また、地元の北星小学校児童が描いた灯台の力作も紹介される。

約120種類で「観音島海浜植物群落」として市の指定記念物（天然記念物）になっている。かつては北限のイワダイゲキが隔離分布していた。現在は、南限のエゾヒナノウスツボ、北限に近いハマウドをはじめ寒暖両系の植物が生息している。6月中旬ごろには、オニユリの群生が見られとても鮮やかである。
 貴重な植物と観音崎が作り出す景観は、まさに自然の宝である。この景色が、いつまでも地元の人々に愛され、守られていくことを願いたい。

観音島の自然



6月中旬に群生するオニユリ



(参考資料：七尾市の文化財、崎山のれきし)



DATA 多子石

観音様のななめ向かいに、通称「水の潤」と呼ばれるところがある。そこに子授けの石「多子石」が鎮座している。直径3メートルほどの大きな石の中に小さな石が多くあり、それが子を宿しているように見えることから、この呼び名がついたと言われている。昔は、子を授かりたいと願う人々が訪れたそうである。